

## デーノタメ遺跡とはどのような遺跡なのか

北本市教育委員会文化財保護課

デーノタメ遺跡は大宮台地の北部に位置し、台地を浸食する江川という小河川の支流に面しています。遺跡名の「デーノタメ」とは、かつてこの地に所在していた溜池の名で、おそらく縄文時代から重要な水源であったものと考えられています。

遺跡の規模は東西約 370m、南北約 230m、面積は約 6ha です（図 1）。遺跡の西部には縄文時代中期（勝坂Ⅲ～加曾利 EⅢ式期）の集落が占め、規模は長径が約 210m、短径が約 140m という楕円形の環状集落で、「関東最大級」の大きさです（図 2）。また、遺跡の東部には後期前葉（堀之内 1・2 式期）の集落が広がり、その後、後期中葉には集落が西側へ展開するため、後期集落は北側の低位面に沿って弧状に展開しています。その長さは約 270m ですから、後期集落としては比較的規模が大きいといえるでしょう。

また、北側の台地縁にはそれぞれの集落が利用していた低湿地遺跡が遺存しています（図 3）。集落と水場をセットで捉えることができる稀有な遺跡であるとともに、全国的に事例の少ない縄文時代中期の泥炭層を主体としていることも注目すべき点です。

この低湿地遺跡では、縄文中期の泥炭層から 6 基のクルミ塚（図 4）、砂道跡、土器集中遺構とともに多量の漆塗土器が（図 5）、後期の泥炭層では溝跡やトチ塚、木組遺構などが検出されてます。また、中期・後期ともに豊富な植物遺体が出土しました。

こうしたデーノタメ遺跡の特徴をまとめると次のようになります。

- ① 縄文時代中期と後期の集落が大きく、良好に遺存していること。
- ② 1,200 年の長期にわたって集落が継続していたこと。
- ③ 集落と集落が利用していた水場がセットで遺存していること。
- ④ 黒漆と赤漆を用いた漆塗土器が多く出土していること。
- ⑤ 豊富な植物遺体が出土し、縄文人の食の実態がわかること。
- ⑥ 現状が雑木林等に覆われ、文化的景観を残していること。





図 1 デーノタメ遺跡の集落変遷



図 2 中期集落の調査(第 1 次調査)



図 3 低湿地の調査(第 4 次調査)



図 4 4 号クルミ塚



図 5 漆塗土器